旅としての臨死体験-日本人臨死体験者の調査事例より-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2013-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩崎, 美香 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/14781

情報コミュニケーション研究論集
第2号　2011. 2

旅としての臨死体験
——日本人臨死体験者の調査事例より——[1]

Near-death experience as an analogy with journey
——Based on the cases by the investigation of Japanese near-death experiencers——

博士後期課程　情報コミュニケーション学専攻　2010年度入学
岩　崎　美　香[2]
IWASAKI Mika

【論文要旨】

臨死体験とは，典型的には死に近づいた人，もしくは生理的または情緒的に強い危機状態にある人に起こる，超越的で神秘的な要素を帯びた出来事を指す。日本では，死に瀕した人が「三途の川を見る」「花畑を見る」といった体験として広く一般に知られてきた。アメリカでの臨死体験研究に影響を受けて1980年代後半から日本でも研究が行われてきたが，日本人の臨死体験の実態については充分に研究が尽くされたとは言えない。本稿では調査データを検討し，また調査事例に基づいた俯瞰図を作成することによって日本人の臨死体験の全体像に迫っていくことを意図した。

臨死体験を旅になぞらえ，その俯瞰図を辿る時，臨死体験の起伏に富んだ死と再生のイニシエーションの輪郭がより鮮明に浮かび上がってくる。臨死体験後に価値観や感覚に大きな変化をきたした場合，日常生活で困難を抱える場合があるが，それを徐々に日常生活の中で調整しつつ，日常の外側の世界で得たことを日常に還元していくことが見られる。ヌミノーゼ的体験を日常世界に豊穣として持ち込む社会的な経路が見失われている現代において，臨死体験は日常の外側の世界と日常世界の往還の調和的な道筋を示唆する。

さらに事例を蓄積し欧米との比較を視野に入れながら，日本人の臨死体験の特性や臨死体験後の変化の特徴について明らかにしていくこと，また，学際的に展開されてきた臨死体験研究を今後どのように共通了解を形成しながら発展させていくかについては今後の課題としたい。

【キーワード】 臨死体験，旅のアナロジー，異世界体験，死と再生，往還

[1] 本稿は2009年度の修士論文『旅としての臨死体験と死生観の変容—日本人の事例を中心に—』の一部を抜粋し，加筆修正した。本稿のすべての文責は執筆者に帰属する。

[2] E-mail：iwskmk007@ybb.ne.jp

論文受付日　2010年10月1日　　掲載決定日　2010年11月10日

1. 臨死体験研究の成立と日本での課題

生命の危機状態をきっかけにして，まるで死後の世界に行ったかのような神秘的な体験をし，再びこちら側に戻ってくる――こうした体験は紀元前の昔から記録されている[3]。ただし，「臨死体験」(Near Death Experience) と呼ばれるこの種の体験が，研究として取り上げられるようになったのは，比較的最近である。1970年代のアメリカで，エリザベス・キューブラー・ロスのターミナル・ケアの講演や，レイモンド・ムーディの著作『かいまみた死後の世界』がきっかけとなって，臨死体験に高い関心が寄せられるようになった。1980年代になると，統計的な手続きを踏んだ調査が行われるようになり，瀕死状態に陥った人間に一定の割合で出現していること［リング 1981 (1980)；セイボム 2005 (1982)］，また全米の成人人口の5%に臨死体験者が存在する［ギャラップ 1985 (1982)］など，臨死体験という現象が広く存在していることが明らかにされていく。アメリカの臨死体験研究は，医学，心理学，哲学などさまざまな領域の研究者によって手がけられ，学際的とも言える研究分野として発展してきた。

日本では，死に瀕した人が「三途の川を見る」「花畑を見る」といった体験は，広く一般に知られてきた。アメリカの一連の臨死体験研究に影響を受け，こうした体験が研究対象として意識されるようになった。そして，1980年代後半以降，民間伝承研究者，ジャーナリスト，宗教学者，医師などによって，日本人の臨死体験が著作や論文に取り上げられるようになっていく［松谷 2003 (1996)；立花 2000ab (1994)；ベッカー 1992；山村 1998］。

しかし，90年代以降，日本の臨死体験研究はほとんど進展せず，特に日本人の臨死体験の実態については充分に研究が尽くされたと言えないままに放置されている観がある。本稿では，日本人の臨死体験について調査に基づきながらその実態を把握し，さらに体験の全体像を示しながら，考察を深めていくことを意図している。

2. 臨死体験者の調査

2-(1) 研究方法の選択と調査方法

臨死体験者の絶対数は多くはないと推測されるため，調査対象に一定の母集団を設定せず，日本国内にいる体験者を見つけて，その度に一人ひとりをインタビューして事例を積み重ねていくような質的調査・研究を採ることにした。調査ではあらかじめ，臨死体験に至る経緯，体験内容，その後の変化などの質問項目を設定し，それをもとに半構造化された面接でのインタビューを行った。

2-(2) 分析の方法

インタビュー内容は，録音やメモを文章化して，ローデータをまず作成した。次に事例ごとに，

[3] 例えば，プラトンの『国家』の戦士エルの逸話など

体験者の背景，臨死体験の内容，臨死体験後の変化等の項目別に要点を記した表を作成し，調査結果について検討。さらに，仮説生成的な研究方法として優れている修正版グランデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）［木下 2003；西条 2007］に基づいてデータのコード化を行い，抽出できた概念同士のつながりを捉え，調査事例での臨死体験の全体像を浮かび上がらせることを試みた。

2-(3) 調査期間とインタビュー対象者

調査は2008年３月から2009年10月中旬まで実施した。対象者として設定したのは，男女や年齢を問わず，臨死体験を持ったことのある日本生まれの日本人である。

今回，実際にインタビューした臨死体験者は，筆者の直接の知人の他，指導教官や知人や友人から紹介されて会うことができた人々で，男性５名，女性７名の合計12名である。この内１名は臨死体験を二度しているため，調査対象者は12名だが，臨死体験の事例は13例となっている。インタビュー時の年齢は15歳から80歳までにわたる。臨死体験をした年齢は６歳から69歳までに及んでいる。臨死体験からの経過年月は，インタビューを行った時期の数ヶ月前から41年前まで遡るものまでがあり，平均経過年数は21年であった。

3. 調査結果にみる臨死体験者

3-(1) 体験者の背景

調査では，参考として対象者の背景について尋ねる質問を設定した。ただし，調査事例の数自体が少ないので，本研究では臨死体験と体験者の背景との関係は参考程度にとどめる。

まず，体験者の当時の年齢，職業などの属性は多様であった（〈表１〉参照）。性別についても女性７事例（７名），男性６事例（５名）とほぼ半々であった。臨死体験に至るまでの状況も高熱，突然の発作，急性の疾病，病気の手術，事故，出産など多岐にわたる。出身地に関しては首都圏が若干多いが，これはインタビュー調査上の都合で，対象者がほとんど首都圏在住者に限られてしまったためと考えられる。つまり，年齢，性別，出身地，属性，臨死体験に至る状況などの背景と，臨死体験が起きることとの何らかの関係はここでは見出せない。

臨死体験以前からの信仰や精神修養の有無についての質問では，９名の対象者が，何の信仰もなければ精神修養も行っていなかったと回答している。他の３名についてであるが，一家でカソリックを信仰（事例A），当時は創価学会に入っていた（事例B），特に信仰はないが先祖を守っている（事例E）という回答になっている。信仰はなかったが，祖父の影響で見えない世界を受け入れる下地はあった（事例I）と回答している事例もある。だが，臨死体験者に特徴的な信仰や精神修養の背景は見出せなかった。

臨死体験についての知識があらかじめあったかどうかを問うために設定した「臨死体験のことを以前から知っていたか」という質問項目には，10事例においては，何らかの形で臨死体験について知っていたり，輪廻などの死後の世界についての何らかの観念的な知識を持っていた。ただし，

〈表 1〉 臨死体験者の背景

事例	性別	体験年齢	出身地	属性（当時）	臨死体験に至った状況	以前からの信仰や精神修養	臨死体験のことを以前から知っていたか	以前から超常的な体験があったか	幼い頃の虐待の有無	全身麻酔の有無
A	男性	10歳	東京都	小学生	高熱が2週間継続	一家でカソリック信者	死にそうになった人が花畑や川を見るということを話としては聞いていた	特になし	不明	不明
B	男性	28歳	大阪府	メーカー研究員	心臓発作	母の影響で創価学会に入っていた（当時）	当時信仰していた宗教の影響で輪廻の考えは根底にあった。臨死体験についての知識はなかった	特になし	特になし	不明
C1	男性	13歳	神奈川県	中学生	脳髄膜炎	不明	知らなかった	呼吸が苦しくなる夢をよく見た	不明	不明
C2	男性	26歳	神奈川県	映像制作者	肺水腫	不明	「チベット死者の書」で，死後の意識が辿る世界について読んでいた	一度目の臨死体験以来，体外離脱が自在化	不明	不明
D	男性	6歳	東京都	幼稚園生	扁桃腺の手術	特になし	もしかしたら，TVで観て知っていたかもしれないが，はっきりしない	特になし	特になし	扁桃腺の手術で全身麻酔
E	女性	49歳	埼玉県	パート勤務	交通事故	特別な宗教を信仰していないが，先祖に線香を供えるのが日課だった	知らなかった	特になし	不明	交通事故に遭って全身麻酔で手術
F	女性	26歳	大分県	主婦	出産	特になし	巷で一般的にある話として聞いていたし，テレビからの情報でも知っていた	特になし	特になし	不明
G	女性	20歳	福岡県	大学生	高熱が継続	特になし	不明	特になし	特になし	臨死体験以前は不明。臨死体験後に3回全身麻酔で手術の経験
H	女性	69歳	栃木県	主婦	脳静脈瘤の手術	特になし	テレビで観たことがある話として知っていた	特になし	特になし	脳静脈瘤の手術で全身麻酔
I	男性	13歳	静岡県	中学生	池で溺れる	特になし。しかし，祖父の影響で見えない世界を受け入れる下地はあったと感じる	臨死体験という言葉については全く知らなかった。三途の川の向こうに誰かがいて帰された，という話は知っていたかもしれない	• 家で寝入りばなに自分が巨人になったかのような視点で家を外側から見た • 金縛りにあって，人が部屋に入ってくる気配とともに，呼吸困難になる体験が頻繁にあった	特になし	不明
J	女性	30歳	東京都	小学校教師	急性腎不全	特になし	近所のおばあさんから，向こう側から呼ぶ声がしたり手招きされたりしたが，夫の呼ぶ声で帰ってきたという体験談を聞いたが，御伽噺のように受け取っていた	特になし	特なし	不明
K	女性	30歳	大阪府	主婦	卵巣のう腫の手術	特になし	テレビなどで臨死体験のことを見聞きしたが，そういうのは作り話だと思っていた	特になし	特になし	卵巣のう腫の手術時に全身麻酔
L	女性	67歳	京都府	自営業	急な血圧の上昇	特になし	恐山に行った時に「三途の川」と名づけられた川を見たことがあった。ごく普通の川だった	特になし	特になし	特になし

花畑，三途の川，亡くなった親族に呼ばれる，という一般的になじみのなる逸話で臨死体験を知っていたとしても，実際に体験された臨死体験にはあらかじめ知っていた内容が全く出てこなかった事例がいくつか見出される（事例I, Jなど）。また，臨死体験について聞いたことはあっても，作り話だと思っていて全く信じておらず，自分がなぜそのような体験をしたか腑に落ちないとぼやく体験者もいた（事例K）。よって，臨死体験の知識を持っている人が多かったからといって，臨死体験と予備知識との強い関係があるとは言い難い。

臨死体験のような超常的で神秘的な体験を以前からしている人物だったのかを問う質問では，2名の対象者（事例C1(C2), I）だけがそうした体験をしたことがあると答えている。しかし，他の10人は全くそうした体験を持っていないということを考えると，2人の体験者に以前からあったとされる素地のみが臨死体験の有無に結びつくわけではないと推測される。

リングは臨死体験者には幼い時に虐待を体験した確率が高い〔リング 1997〕としていることから，幼い頃の虐待の有無を問う項目を設定したが，虐待があったと回答した対象者はこれまでのところ皆無で，虐待と臨死体験の出現には今回の調査では関連性が見出せる手がかりは何もなかった。

また，全身麻酔と臨死体験との関連性があるのではないかとの指摘[4]で，調査の後半に全身麻酔の有無を問う質問項目を設けた。臨死体験時の引き金となった病気やケガの手術時に全身麻酔を施されている事例が，4事例あった（事例D, E, H, K）。この項目については，臨死体験と関連するのかどうか，今後の検討の課題としたい。

3-(2) 体験内容

臨死体験の前半で体験されているのは主に，移動や移行，そして何らかの存在との出会いである（〈表2〉参照）。後半では，帰るように促されたり，障害物が立ちふさがるなど，そこから先に進めなくなり留まれなくなる事態が発生する事例が大半であった。このように，臨死体験の内容は，どこかに移動や移行し，誰かと出会うという前半と，先に進めなくなり留まれなくなるという後半の大きく二つの場面展開に分かれていることが見受けられる。ただし，少数ではあるが，事例Dや事例Jのように特段の場面展開はなく，同じ光景が続く中に漂っているといったケースもある。

3-(3) 体験の構成要素

臨死体験では連続した一回の体験の中に，複数の構成要素が見出される。たとえば，光に包まれる体験をした後，花が咲く野原や川の景色が見え，川の向こうに微笑みながら自分の方を見ている人たちがいる，といった具合である。

構成要素に着目すると，亡くなった肉親や何らかの存在との出会いが6例（事例A, C2, F, H, I, L）と最も多かった。次いで，花園の光景が5例（事例A, E, F, H, L），離れたところから自分を

---

[4] 蛭川立先生の私信にて

〈表 2〉 体験内容

事例	性別	体験年齢	体験したこと・目にした光景	何らかの存在との遭遇	体の感覚	時間感覚	体験の終わり
A	男性	10歳	黒い服を着た顔のない女の人と一緒にエレベーターに乗る。エレベーターが上か下かに動いて止まってから開くと，周囲はすごく明るく，黄色や赤の花々が見えた	顔のない（目などがない）黒い服を着た女性がエレベーターに乗って現れる	言及なし	2分もないくらいの短い体験	エレベーターが開いて，黄色や赤の花々が見えたところで終わる
B	男性	28歳	倒れて次の瞬間に斜め上から自分の顔を見ていた。「死ぬのはいやだ。結婚相手に会いたい」と思った瞬間，ある一点からこちらを照らす真っ白い光が見えて，その中に吸い込まれて意識が戻った	なし	息苦しいという感覚はなかった。体が冷たくなっていく感覚があった	言及なし	「まだ結婚していない」と思った瞬間，白い光に吸い込まれ，体から離れていた意識が体の中に戻っていった
C1	男性	13歳	とても気分が軽くなって上半身を起したところ，自分の身体が横たわって寝ているのを目にした。その後，何度も天井の方向に上昇して，天井の模様が近づいた	なし	甘い蜜のような素晴らしい感覚に包まれてボーっとした	言及なし	自分の意思で必死に体の中に戻った
C2	男性	26歳	チベット的な姿をした観音様のような女性が助けに来た様子でやって来た。ピンときて拒否したら，突然女性の顔が憤怒相になった（詳細は不明だが，地獄の体験もあった）	自分を招くかのようにやって来た観音様のような女性	甘くて黄色くて，暖かい感じ	言及なし	招きを拒否すると，観音様のような女性が憤怒相になったところで，意識が戻った
D	男性	6歳	外側から蛍光灯で照らされたかのように無機質な光に包まれている，ガラス瓶をひっくり返したような白色透明のドーム型の部屋の天井から，手術台に側臥位で丸まって横たわり赤ん坊のように泣いている自分の姿を見た	なし	言及なし	言及なし	手術台の上で泣いている自分の姿を天井から見ていた場面で終わっている
E	女性	49歳	両脇に白い花の咲いているゴミ一つない白い舗装道路が続いていて，その道をどこまでも歩いていった。周囲は明るかった。その道にお葬式の花輪が出現して行き止まりになった	なし	体の重さがなく，地面を踏みしめて歩いているという感触もなかった	言及なし	道にお葬式の花輪が出現して行き止まりになったところで終わった
F	女性	26歳	病院のベッドで寝ていたら，急に天井が落ちてきた。パーッと光が差したように目の前が明るくなり，いろいろな色の小花が咲き乱れ，2～3m先には足で跨げるくらいの小さなきれいな川が流れているのが見えた。川ところに3人の人が満面の笑みを浮かべて，立っていた	川のところに微笑みを浮かべた3人の人が立っていた。思わずそちらに行きたくなるくらい魅力的な様子だった	「死ぬんだ」と思いながら，ボーっとした感じになっていた。死への恐怖感はなかった	長い時間でなく，一瞬	付き添っていた母親に自分の名前を呼ばれて我に返る
G	女性	20歳	立ち上がって，部屋の向こうにいる往診に来た医師と母のところに行って話しかけるが，二人に全く無視されてしまう。いぶかりながら後ろを振り返ったところ，自分の身体が布団に寝ているのを目にする	なし	立ち上がったり，相手をトントンと叩いりした，現実的な感触があった	言及なし	自分が寝ている姿を見て「これはどういうこと？」と思った瞬間に意識が途切れた
H	女性	69歳	川の向こうで，父がにこにこと「こっちに来なさい」と手招きしていた。川は増水してとても渡れそうになかったので，そっちには行けないと手で合図した。川の向こう側にはいろいろな花が咲いていた。はるか下流の岸に母がこちらに背を向けて立っていた	亡くなった父が川の向こうから自分を呼び，一方亡くなった母は下流で，背を向けて立っていた。どちらも，亡くなったときの年齢よりもかなり若い様子だった	ここちよくもなければ，不快な感じでもなかった	言及なし	母がはるか川の下流で自分に背を向けて立っていたので，「失礼な」と思ったところで終わった
I	男性	13歳	溺れて，気がつくと少し上の方から溺れる自分の姿を見ていた。池の底から来るすごい光が見えて，その中に入ると暗闇だったが，またその中見えた小さな光の中に入った瞬間，太陽が6つある別の惑星に生まれ変わり，そこで年を取って死ぬという経験をした	生まれ変わった惑星には人間のような姿の住人たちがいた。住人たちは，穏やかで，互いに平和で友好的な生活を送っていた	「自分は死ぬんだ」と何か手放した瞬間，呼吸が楽にできるようになった	溺れてから助け出されるまで，15分くらいだったが，1万年くらいを別の惑星で過ごしたような感覚があった	別の惑星で一生を終えて，まだやり残したことのある地球に再生することを決めて控え室のようなところを出た後，池の湖畔で意識を取り戻した
J	女性	30歳	真っ暗な宇宙のようなところに自分がゆったりと，ひっくり返ったり，腹ばいになったりしながらゆらゆら浮かんでいた。宇宙空間のようなところには，きらきらと輝くものが散らばっていた。遠くの左前方奥にきら一っと輝く星のようなものが一点特別強く輝いていた。	なし	体が空間を無重力のような感じでふわふわと漂う。特別気持ちがよいという感じはなかった	時間の感覚がなく，自分が浮遊している状態が長く続いたのか，短いのかというのがわからなかった	きらきらと輝くものが散らばる宇宙空間のようなところに自分が漂っている場面がいつの間にか終わる

〈表 2〉 体験内容（つづき）

事例	性別	体験年齢	体験したこと・目にした光景	何らかの存在との遭遇	体の感覚	時間感覚	体験の終わり
K	女性	30歳	（手術が終わった後）自分から見て右水平方向に伸びる先すぼまりの円錐形の灰色のトンネルの中に頭からヒューーっとものすごいスピードで吸い込まれた。円錐形のトンネルの先にはきれいな桜色をした穴が見えた。ピンクの穴のところにたどり着く手前で，今度は足をバッと引っ張られる感じで戻ってきた	なし	痛くも，痒くも，苦しくもなく，フワーンとした感じ	一瞬の感覚	トンネルの奥に着く手前で，足を掴まれるような感じで引き戻された
L	女性	67歳	周囲にいろいろな色の花が光輝くように咲く中，川の向こうから父に「こっちに来い」と呼ばれた。その隣には伯父がいて，「来ちゃだめだ！」と言っていたので，川にかかる橋の前で迷っていた	川の向こうで来るようにと呼ぶ父と，逆に来るなと言う伯父。伯父は若い頃亡くなったが，父と同じくらいに年取って見えた	特に気がついたことはない	言及なし	父に「（伯父が）来ちゃだめと言うから行かないよ」と答え，しばらくしてから意識がもどった

見る体験が 4 例（事例 B, C1, D, G, I），川の光景が 3 例（事例 F, H, L），光に包まれる・光の中に入る体験が 3 例（事例 B, F, I）だった。その他，橋（事例 L），道を歩く（事例 E），トンネルに吸い込まれる（事例 K），エレベーターに乗る（事例 A），宇宙空間のような暗がり（事例 J），ドームのような部屋（事例 D），太陽が 6 つある惑星（事例 I），地獄の体験（事例 C2），といったものが 1 例ずつあった。

臨死体験の後半には前述したように，先に進めない，その場所に留まれない，というような特有の展開がしばしば見られる。たとえば，花輪が出現して道が行き止りになる（事例 E），などの何らかの障壁が出現する例。また亡くなった肉親や何らかの存在の招きを拒否する例（事例 C2, H, L）。付き添いの母の声で我に返る（事例 F），足を掴まれるようにして逆方向に戻る（事例 K）といったような，引き戻しが起こる例。また，現実世界への心残りを想起する例（事例 B, I）や自分の意思で必死に戻ったというケース（事例 C1）も存在する。事例 H のように，川が増水して渡れず（障壁の出現），父の招きを止むを得ず拒否（招きの拒否），母が自分に背を向ける（拒絶）といったように，進めない，留まれない事態が複合していることもある。

一方，進めない，留まれない事態が発生したわけではなく，ある場面を最後にいつの間にか終わっていたという例（事例 A, D, G, J）も存在する。

出来事や光景といった要素の他に，体験時には独特の感覚が伴っていることが少なくない。心地よい感覚に包まれる（事例 C1, C2），苦しさや恐怖がない感じ（事例 B, F, H, I），体の重みがなくフワフワした感覚（事例 E, J, K）など，病気やケガで苦しんでいるはずの状況からかけ離れた心身の感覚が見出される。

また，時間の感覚についても特異な様相が示される。一瞬の間に多くのことが起こったり（事例 A, F, K），また，一万年くらいの時間を過ごしたように感じたが，後で確かめたら15分くらいの時間に過ぎなかった（事例 I）と，短い時間で凝縮した体験がなされた例や，時間の感覚がない世界だった（事例 J）と時間の感覚自体が失われていたケースも報告されたりした。

ところで，日本人の臨死体験の構成要素の特性として見出されるものはあるであろうか。

日本人の臨死体験事例を取り上げた先行研究〔松谷 2003（1996）；立花 2000ab（1994）；山村 1998〕に照らすと，臨死体験の構成要素として頻出するのは，「何らかの存在との出会い」，「花園」，「川」，「暗闇」の4つであった。一方，ムーディの挙げた臨死体験の15要素[5]に照らすと，「人生回顧（走馬灯体験）」，「普通でない騒音を聞く」といった要素が報告されることが少なかった。

本研究の事例においても，「何らかの存在との出会い」，「花園」，「川」といった要素が比較的多く出現していること，「人生回顧（走馬灯体験）」，「普通でない騒音を聞く」といった要素が報告されていないことなど，先行研究と併せ考えると，日本人に多く見出せる体験内容の特性があることが推定される。この点については，日本人の事例をさらに集積した上で，あらためて考察していく必要がある。

3-(4) 狭間の体験

臨死体験が終わったと思われた後にも，臨死体験と連続するような狭間の領域の体験と思われるものが起こる事例が3例あった（〈表3〉参照）。

事例C2では，意識が戻ったが肺水腫を起して呼吸が苦しい最中に，人間様の存在や，イルカやクジラのような存在などが次々とやってきて体験者を癒すような行為が行われた。事例Eでは，臨死体験時に道の行き止まりに出現した葬式の花輪が，意識を取り戻した体験者の頭上にあったように本人に見えた。事例Hでは，臨死体験の時に出会った亡くなった父母が退院時に体験者を迎えた。このような「狭間の体験」はこれまでほとんど報告されてこなかった。臨死体験に連続して起こった一連の出来事として，検討の対象に含めていきたい。

3-(5) 夢との違い

臨死体験と夢とは体験者にとって区別され得るものなのだろうか。臨死体験と夢との違いについて言及したのは7例であるが，そのうち6例は臨死体験と夢とははっきり区別され得るとしている（〈表3〉参照）。その理由には，何年たってもその記憶が鮮明である（事例A, G, J），意識が戻ってからも臨死体験と現実とではどちらが現実か区別がつかないほどリアルな体験だった（事例I, L），体ごと行っていたという感覚があった（事例K），などが体験者によって挙げられている。内容の一貫性，時間を経ても尚，鮮明な記憶が残る，体験中に明晰な意識がはたらいているなどの点からも夢との違いを区別できると考える。

---

[5] ムーディが指摘した臨死体験の以下の15の要素。①言い表し難さ，②死の宣告を聞く，③平和で安らかな気持ち，④普通でない騒音を聞く，⑤暗いトンネルを見る，⑥体外離脱をする，⑦霊的存在と会う，⑧光の存在としてのまばゆい光を体験する，⑨パノラマ的な人生の回想，⑩全ての知識が存在する領域を体験，⑪光の都市を体験，⑫さまよえる霊的存在の領域を体験，⑬超自然的な救済を体験，⑭境界もしくは限界を感知する，⑮身体に戻る〔ムーディ 1989a 1989b〕

〈表 3〉 体験の位置づけ

事例	性別	体験年齢	夢との違い	狭間の体験	臨死体験への戸惑いや日常生活の困難さ	体験（事後効果も含む）を位置づける指導者や仲間	体験の受容や日常生活での再調整
A	男性	10歳	起きてからも珍しくはっきり覚えているので，普通の夢と異なる感じ	特になし	特になし	特になし	特になし
B	男性	28歳	言及なし	特になし	「そういうのはあるんや」と思いながらも，サイエンスをやっている人間としてひたすら体験を隠すようにした	2年前に精神的な指導者に出会って自分の内面を見るようになり，臨死体験のことを自分の中で振り返る余裕ができた	自分を心身ともに追い込むような自虐的傾向をいましめるための体験だったと受け止めている
C1	男性	13歳	言及なし	特になし	特になし	特になし	特になし
C2	男性	26歳	言及なし	人間の形をした存在が大勢と，イルカやクジラのような存在がやってきて，呼吸が苦しい自分を癒す行為をしてくれた	• 日常と異なった感覚，論理体系，世界の捉え方を見せられて，戸惑った • 体験後に様々なことが見えて分かるなど敏感になり，社会生活上の困難さを感じた	不思議なものが見える人たちやそれに理解のある人たちが自然と周囲に集まってきて，情報交換を行っている	• なるべく以前と変わらないように振舞った • 体に開いたラッパのようなものを丁寧に閉じていった • 日常に着地して「ここに関わろう」と思った
D	男性	6歳	言及なし	特になし	特になし	特になし	特になし
E	女性	49歳	言及なし	病院のベッドの上で意識を取り戻した時，自分の上にお葬式の花輪が見えた。なぜここに花輪があるのかと，看護師に怒りながら花輪をどかすように言った	特になし	リハビリの現場などで自分と同じような体験をした人と体験を互いに話す機会があった	本当に亡くなる時にはあそこを渡るんだなと思った
F	女性	26歳	言及なし	特になし	特になし	アバター・コース（米国のH・バルマーが開発した心理セミナー）で，よくない影響を及ぼす霊的存在に対処する方法を学んだ	死後の世界も輪廻転生もあると思うので特別な体験をしたと思わない
G	女性	20歳	母や医師の着ていたもの，座り方，ふすまの位置，布団の柄など鮮明に記憶。体を起した自覚もあった	特になし	• 母親や友人に話したが，「熱で夢を見た」と言われて信じてもらえない • 不思議なことがいろいろ起こり，対処法が分からずとまどった	霊的な資質を持ち，いろいろな修行をした先生と知り合い，霊的なものや見えない世界を解きほぐしてもらった	ここ3年くらいで，二十歳以来続いていたいろいろなことをきれいに消化し，コントロールできるようになった
H	女性	69歳	夢を見たのだと感じた	退院が決まった時，父が車で迎えに来て，自分の乗った車の後をずっとついて来てくれた。家に帰ったら，リビングのテーブルのところに，ちょこんと母が座っていた	特になし	特になし	死ぬ時はあの川を渡るのかもしれない
I	男性	13歳	ただの夢のではなく，はっきりとしたリアルな体験だった。この世界が現実なのか，それとも惑星での生活が現実なのか，しばらくわからなくなった	特になし	• 臨死体験をどう言い表してよいかわからなかったため，しばらく体験したことを人に話せなかった • 体験を消化しきれず，自分の中にモヤモヤとしたものを抱えた • 質問する前に相手の答えが分かり戸惑う	• 世界中の先住民を訪ねて一緒に生活し，目に見えない世界について様々なことを学んだ • 麻の普及活動のきっかけは臨死体験だったと講演会で話したら，もっと詳しく聞きたがった観客が何人もいた	• 人から励まされて臨死体験のことをオープンに話すようになって，胸のつかえが取れた
J	女性	30歳	後々になっても狂いなくその場面が鮮明にイメージできるという点で普通の夢とは異なる	特なし	あの時の体験は何だったのかという疑問がずっとあった	TVで自分とほとんど同じ体験をした人がいるのを知った	10年以上たってから臨死体験と知って，納得した
K	女性	30歳	体ごと行った感じがある。体験としては脳で覚えているというよりも，体の感覚で覚えている	特になし	死んだら魂もないし，土に戻ると思っていたので，自分がどうしてそういう体験をしたのか腑に落ちない	特になし	特になし
L	女性	67歳	本当にそこに行っていたような感じがした。気がついた時に自分が家にいるのがすぐに分からなかった	特になし	特になし	特になし	ああいうところを見たというのは，なかなか経験できないことを経験したと思っている

3-(6) 臨死体験をどう捉えているか

臨死体験者は自分の体験をどのように捉えているだろうか（〈表3〉参照）。「二度と見れないくらい素晴らしく美しいところだった。なかなか経験できないことを経験した」と体験を肯定的に捉えるケース（事例L）や，「本当に亡くなる時にあそこを渡るんだなと思った」などと死後のイメージと重ねながら比較的スムーズに受け止めるケース（事例E, H）など，臨死体験を葛藤も特になく自然に受容する事例もある。また「輪廻転生はあると思うので特別な体験をしたと思わない」と体験したこと自体を意に介していないとする場合（事例F）もあった。

しかし，体験に戸惑うケースも少なくない。「あの体験はなんだったのだろう」とずっと心にひっかかっていたというケース（事例J）から，これまでの自分や世の中の価値観と相容れないため，自分の体験に困惑を感じるケース（事例B, C2, I, K），また，他人に分かってもらえない孤独感を感じるケース（事例G, I）まである。さらに，臨死体験後に出現した超感覚によって，さまざまなことが見えたり分かったりという敏感さによって社会生活上の困難さを感じた（事例C2, G, I）といった深刻なものもあった。

日常生活の中での再調整と体験の受容に大きな役割を果たすのは，そうした体験に適切な方向付けを与えることができる指導者や仲間の存在である（事例B, C2, E, G, Iなど）。「仲間」に準じるものとしては直接会ったことのある人だけでなく，事例Jのように，TV番組上に取り上げられた自分と同じような体験をした人なども広く含めることができると考える。このような点については，日常生活の復帰の問題と共に注目したい。

3-(7) 臨死体験後の変化

調査結果によると，多くの人に臨死体験後に何らかの変化が見られる（〈表4〉参照）。臨死体験後の変化として，最も際立っていたのは，死に対する考え方・感じ方の変化である。この変化には，大きく分けると2つのパターンが見出される。ひとつは，「死が恐ろしくなくなった」というように死への恐怖がなくなったり，薄らいだりするというパターンである（事例C2, G, I, J）。もうひとつは，「死後の世界はあると思った」，「亡くなる時はあそこを通るんだなと思った」など，死後の世界を何らかの形でイメージ化するパターンである（事例B, C2, E, G, H）。事例C2や事例Gのように2つのパターン両方が見出される場合もある。子供の時に臨死体験をしたケース（事例A, C1, D）では，死に対する考え方・感じ方に変化が見出されなかった。成人の事例で，死に対する考え方・感じ方の変化がなかったのは少数だが，「小さい頃から死が怖かったが，臨死体験後も相変わらず死が怖い」というケース（事例K），以前から輪廻転生の存在を確信していたので死への考え方は変化していないというケース（事例F）があった。

次に，死についての考え方・感じ方以外での人生観や価値観の変化も見られた。まず，臨死体験で日常世界とは異なる体験をしたことによって，目に見えない世界の存在を確信したり，そうした世界に対して興味関心を寄せる（事例B, C1, I）という変化が挙げられる。また，臨死体験以前に

〈表４〉 臨死体験後の変化

事例	性別	体験年齢	死に対する考え方の変化	人生観・価値観などの変化	身体的変化	超感覚の出現	その他の変化（闘病体験自体による変化など）
A	男性	10歳	特になし	特になし	特になし	特になし	特になし
B	男性	28歳	死後の世界はあると思った	• 一般のサイエンスでは解明できない領域が存在すると認識 • 科学を超えた科学で見えない世界を解いていくことを自分の研究テーマとしたいと思った	特になし	インタビューの1年前に，はじめてUFOを見る体験をした（注1）	• 激務だった当時の会社を辞めた • 結婚願望を再認識し，2年後に結婚した
C1	男性	13歳	特になし	見えないけれど存在するかもしれないものに抵抗感がなくなった	特になし	意識を自分の体の外に飛ばすクセが直らなかった	特になし
C2	男性	26歳	• 死後には時系列的に生きている我々には理解できない世界がある • 死を身近に感じるようになった • 死が怖くなくなった	• これまでの価値観が自明でなくなり，物事を素のままで捉える視点ができた • 現実に対する認識が変わったので，仕事で制作する映像のクオリティが高まった	• 肺水腫が一晩でよくなった • 体の12箇所にラッパのようなものが開いた	• 霊的存在が見える • 人間，植物，鉱物などのエネルギーの流れが見える，感じられる • シンクロニシティが頻繁に起こる	• 人間は死ぬということで期限が決まっていると実感し，物事にシビアになった
D	男性	6歳	特になし	特になし	特になし	特になし	特になし
E	女性	49歳	亡くなる時にあそこを通るんだなと思った	特になし	特になし	特になし	• 交通の安全に気を配る • 療養中，周囲からたくさんの助けを受けたので，自分も人を助けたいと思った
F	女性	26歳	死後の世界も輪廻転生もあると思うので，特に変化していない	特なし	特になし	4～5年前から三次元の人間でないような人が見える（注2）	ケミカルな薬のせいであのような体験が起きたと思い，次の出産は陣痛促進剤や麻酔を使わない方法で生んだ
G	女性	20歳	• 輪廻転生の考えに理解を示すようになった • 小さい頃から恐れていた死が気がつくと怖くなくなっていた	• 常識にとらわれない価値観で考えるようになった • 体外に離脱するという究極の体験をしたので，ものごとは何とかなるという人生の指針みたいなものをもらった	特になし	• 親族の死を予知する • 夢を通して死者と交信する • 人間や植物のエネルギーが感じられる • 花の教室の生徒たちのエネルギーと交流するような精神的なレッスンが実現 • 他人の状況がテレビモニターのような画面に映る • UFO目撃	• 臨死体験，出産，手術，父親の介護など，いろんな経験を経て，今を生きるということに集中するということに到達した
H	女性	69歳	死ぬ時はあの川を渡るのかもしれないと思う	特になし	特になし	特になし	特になし
I	男性	13歳	臨死体験で転生した惑星では，死は卒業であり，解放であり，幸せであったので，死が恐ろしくなくなった	• 目に見えない世界に興味を持ち，目に見えない世界を生活の中心に据える世界中の先住民を訪ねた • 世の中の価値観に囚われずに客観的に物事を見れるようになった • 別の惑星で麻の加工に携わった記憶がきっかけとなって，バイオマスとしての麻の利用法を普及させる活動に積極的に取り組んだ	アトピー性皮膚炎が治った	• 自分が相手に聞こうと思っていたことに対する相手の答えが前もってに分かるようになった • 少し上空の視点から周囲の状況を把握できる	特になし
J	女性	30歳	死ぬ瞬間自体は怖くないのだと思った	特になし	特になし	親類がいつ亡くなるということが敏感に分かるようになった	• 人生がいつまでも続くようなイメージで考えなくなり，物事の優先順位が明確化 • 所有欲が薄くなった
K	女性	30歳	変化なし。小さい頃から死が怖かったが，臨死体験の後も変わらず死がこわい	特になし	特になし	特になし	健康に特に配慮するようになった
L	女性	67歳	（死後に行くかもしれない）三途の川はこういう美しいところなのだと思った	特になし	特になし	特になし	特になし

※表中の（注1）と（注2）の超感覚の出現については，臨死体験から10年以上を経てからのものなので，臨死体験との関係は明らかではない

持っていた価値観や常識に囚われない視点が確立するケース（事例 C2, G, I）もあった。以上のような 2 つの変化が混在している事例もある（事例 I）。

人生観や価値観の変化が職業上のモチベーションを変化させることもある。たとえば，事例 B の体験者は研究職に就いているが，「科学を超えた科学で何かを解いていく」ということを自身の研究テーマとして設定するようになった。また映像制作の仕事に携わる事例 C2 の体験者は，現実に対する認識が変わったことによって，仕事で制作する映像の質が向上したことに触れている。事例 I では，臨死体験の中で麻の加工に携わり，後に麻に関連する活動が本人のライフ・ワークとなった。

ところで，臨死体験では，生命の危機や闘病体験を経たことによる心理的な変化も見出される。代表的なものには，人生の有限性を認識し，自分の人生の目的や物事の優先順位や選択に自覚的になったケース（事例 B, C2, J），この瞬間を生きことに集中するようになったりと日常生活に一種の凝集性がもたらされたケース（事例 C2, G）などがある。より現実的に健康や安全に配慮するようになった（事例 B, E, F, K）ということも報告された。その他，療養中に助けや励ましを受けたことから，「自分も人を助けたい」と思うようになった，事例 E のようなケースもある。

身体的な変化も報告された。事例 I では，臨死体験の直後にアトピー性皮膚炎が治癒した。事例 C2 では，臨死体験に連続する狭間の体験で，不思議な存在から癒しを受けた後，体が楽になり，肺水腫の影も消えたことが検査で判明した。また肺水腫が治った直後に，体の12箇所に「ラッパのような形をしたもの」が開いているのを感じた。体験者によれば，ラッパ様の器官はヨーガでいうところのチャクラの位置に出ていて，それは一連の超常的感覚の出現の時期と一致していた。

続いて，臨死体験後の超常的感覚の出現について触れておく。13例中 7 例[6] が臨死体験後に何らかの超常的感覚や超常現象を体験している。例を挙げると，親類がいつ亡くなるか敏感に分かるようになった（事例 J）という虫の知らせのようなものや，夢の中で亡くなった人から具体的なことを告げられ，それが後で現実に起こるようになった（事例 G），相手に尋ねようと思っていたことに対する相手の回答が言う前にはっきりと分かった（事例 I），という未来予知的な感覚が出現したというケース。また，何らかの霊的存在が見える・感じられる（事例 C2, F, G），また人間，植物，鉱物などのエネルギーが見える・感じられる（事例 C2, G）というように，通常では目に見えないものを感知する能力が出現したケースも報告された。他人に起こった出来事がテレビモニターのような画面に映し出されて見える（事例 G）と，本人が知り得ないような過去の出来事を感知するケースなども見られる。意識すれば頭上の視点からものを見ることができる（事例 I），体外離脱が自在にできるようになった（事例 C1）ということも報告されている。シンクロニシティ現象と感じられることが頻繁に起こる（事例 C2）と話す体験者もいた。UFO（未確認飛行物体）を目

[6] ただし，7 例中の 2 例（事例 B, F）における超感覚，超常現象は臨死体験後10年以上を経てから出現しており，臨死体験との関連は明確ではない。

撃する（事例 B, G）といった報告もあった[7]。

リングは遠隔透視能力，テレパシー，予期や予知，過去の探知，体外離脱，霊的な存在の導きなどが臨死体験以前に比べて高い割合で出現したとする〔Ring 1984〕。また，サザーランドやアトウォーターの研究でも臨死体験後のサイキック現象の増加についての報告がある〔サザーランド 1999；アトウォーター 1997〕。今回の調査でもそうした傾向が示される[8]結果となった。

4. 旅のアナロジーとしての臨死体験

4-(1) 死と再生のイニシエーションとしての臨死体験

前節では調査結果を項目ごとに検討していったが，ここでは調査データに基づく臨死体験の全体像に肉迫していくため，インタビューデータをコード化し概念を抽出するという手続きを行った。抽出した80余りの概念を同系列と思われる概念ごとにまとめ，上位のカテゴリーを設定し，さらに上位のカテゴリー同士をまとめて，より上位のカテゴリーを設定していった。カテゴリー同士のつながりは〈図 1〉のように表される。

まず，最上位のカテゴリー同士のつながりでみてみよう。臨死体験はまず，心身の異変による《日常意識の後退》からはじまる。そこから《異なった世界への参入》として括られる世界が展開する。その後《異なった世界から離脱》して，《日常への復帰》で締めくくられる。

最上位のカテゴリー同士のつながりからは，「分離」「過渡」「統合」といったイニシエーション［ファン・ヘネップ，1995］の構造が浮かび上がる。すなわち，《日常意識からの後退》は，日常からの分離である。《異なった世界への参入》から《異なった世界からの離脱》までは，死後の世界を彷彿とさせるような異世界への移行である。《日常への復帰》は，日常への再統合である。

臨死体験は文字通り，心身の危機的状態から甦った人にとっての，死と再生の体験であり，世界中に見出される死と再生のイニシエーションとの類似性なども指摘されてきた〔グロッソ 1991〕。臨死体験の「死と再生体験」は臨死体験後の変化とも深くかかわっているとされている［ノイエス 1991；柿原 2006 2008］。

死と再生のイニシエーションである臨死体験をより具体的に把握する手立てとして，臨死体験が異世界体験として表出することが多いことに注目したい。ここで仮に異世界体験＝旅として考えてみる。旅もまた，日常からの分離，異なる世界への移行（過渡），日常への帰還による統合，といったイニシエーションの構造を備えている［谷 1985］。

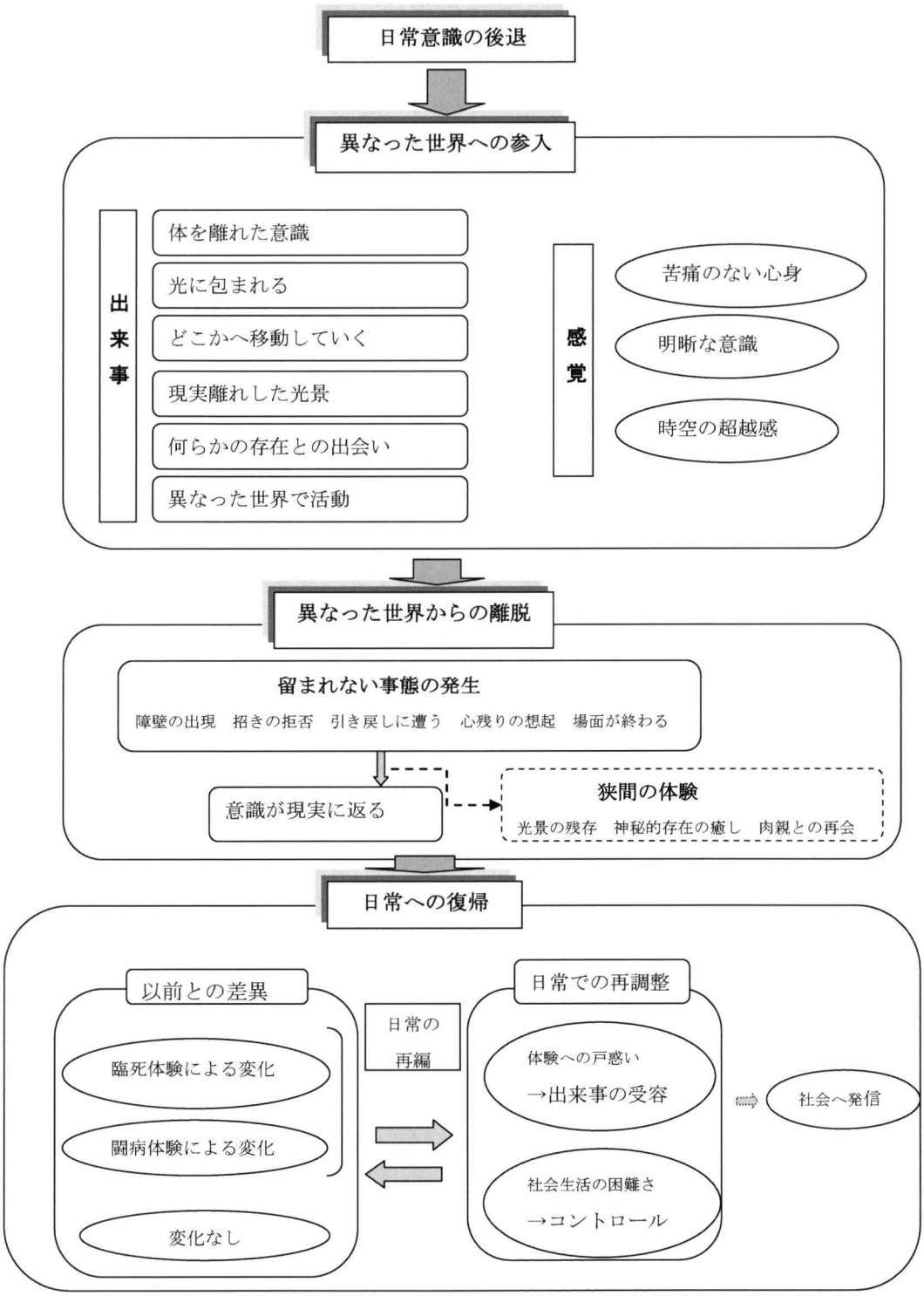
旅とは，“日常的な領域とは異なる世界への移動”として定義される［谷 前掲文］。が，必ずしも物理的な空間移動を伴うものを指すだけでなく，たとえば「心の旅」「哲学の旅」といったよう

---

[7] リングは臨死体験者が，UFO との遭遇体験をしていることが多いことを指摘している〔リング 1997〕。本稿の調査事例での体験者の UFO 遭遇にも注意を払って記録した。

[8] 報告された超常的感覚の出現はあくまでも本人の申告であって，現象として客観的に裏付けられたわけでない。

〈図１〉 臨死体験の全体像（分析結果に基づくカテゴリー同士の結びつき）



に，日常から離れて行う精神活動を指す場合もある［宮本 2006］。

また，臨死体験との関連で言えば，現実の物理的移動を伴うものであれ，日常を離れた精神活動であれ，旅は主観的なものとして体験されるという点が重要である。たとえば，別々の人が，実際に存在する同じ場所に旅したとしても，同じ体験を持つとは限らない。同じ場所であれば同じような光景を目にするかもしれないが，生起する主観的体験世界は個々人によって異なってくるのである。臨死体験が脳生理学的な現象の帰結として起こることであるにしろ，体から離れた意識が実際に異世界を体験しているにしろ，旅を体験していることには変わりない。

さらに，臨死体験後の変化についても旅が手がかりを与えてくれそうである。旅によって，未体験の世界についての知見を得て経験世界の領域が拡大すること，日常からの離脱によってそれまでの所与の世界や日常的な関係を客観化できるようになること，自己を見直して自己と生活世界との関係が調整されたり，刷新されたりすることなどが指摘されている［谷泰 前掲文］。

以上のような点を踏まえて，〈図 1〉に示されたカテゴリーのつながりを，旅になぞらえながら肉付けし，今一度辿ってみることにする。

4-(2) 旅のアナロジー

まず旅としての臨死体験は，目的や好奇心に促された本人の自発的な意思ではなく，心身の変調をきっかけにもたらされた，「突然に投げ込まれた旅」として始まる。

思いがけず始まった旅の中では，現実離れした事象が展開される。例えば，普段は見ることがない外側の視点で自分自身を見ることもある。光に包まれたり，道路，エレベーター，トンネルを通じてどこかへ移動するうちに別の世界の光景を目にする。それは，目も覚めるような美しい花野であったり，こちら側とあちら側の境目にある川であったり，薄暗がりに光がまたたく異次元のような空間であったり，または太陽が 6 つ輝く別の惑星のような異世界の光景であったりもする。そして，そこでは亡くなった親しい人や，日常世界の人ではない神秘的な存在と出会うこともある。また日常とは異なった感覚が保持されている。たとえば一瞬の間にたくさんのことが起きたり，長い時間だったと思ったことがほんの短い時間であったりする。特定の人や場所を思い浮かべるとそれが目の前に映像として現れる。体も重苦しさはなくフワリとしていて，時には何とも言えない快さを感じる。

旅の中で体験されるさまざまなことは，日常世界の外側の体験とでも言うべき側面を持っている。日常の外側の体験は，これまで知ることのできなかった未知領域の発見（あるいは再確認）とともに，旅を体験した本人に強い印象を残す。

不思議なことに，その先に進めない障壁が現れたり，呼び戻しを受けたり，あるいは本人の拒否といった留まれない事態が発生する。またはいつの間にか場面が途切れるなどして，日常世界へと帰還する。直後は，日常の外側とこちらが側の世界との間は，この時まだ交通可能である場合もある。たとえば日常の外側の世界にあったものが出現するのを目にしたり，亡くなった親しい人や不

思議な存在に遭遇することもある。

こちら側の世界に帰ってきて，一旦停止していた日常生活の中に戻っていく。しかし，旅はまだ終わっていない。日常では以前と何か違うという差異感覚が生じる。それはまず，日常の外側の世界を体験したことで，死後の世界や見えない世界を認識したり確認したことによる差異である。

また，日常の外側の世界を見たことによって日常世界をこれまでと違う目で眺めたり，日常世界と自分との関わりの見直しが行われたりする。今までの常識にとらわれない価値観を確立したり，新しい行動を起すということもなされる。

日常の外側の世界を体験した後，感覚が開いて，いろいろなことが見えたり聴こえたり感じられたり，また，病気が治るといった体に変化が生じることもある。一方，特に変化が生じず，以前とほとんど変わらず日常生活に復帰する方向に落ち着く場合もある。

何らかの変化が生じた場合，日常の外側の世界と日常世界の間のギャップに戸惑ったり，以前と差異が生じた感覚の中で社会生活を送ることに困難さを感じることもある。日常の外側の出来事を分かち合ったり，あるいはアドバイスをくれる人間との出会いなどを経る中で，出来事が整理されたり，変化した価値観や感覚をうまく調和させたりコントロールする術を身につける。出来事の受容や変化に伴う困難への対処を経て，日常の外側の体験で得たことを，さまざまな形で表現し社会に発信することもある。このように，旅の後の変化とそれに対する再調整は連動してはたらき，日常の再編が行われる。日常生活の再編の後，日常生活への復帰が完了する。

以上のように，旅のアナロジーで全体像を辿り，いったん日常世界から隔たった後に，日常の外側の世界と接触し，再び日常世界に戻ってくる道筋を具体的に捉えることができた。旅のアナロジーによって，日常の外側の世界と日常とを往還する，死と再生のイニシエーションとしての臨死体験がより鮮明に浮かび上がってきた。

5. 臨死体験の旅が示唆すること，および今後の課題

本論文では13事例のデータに基づく現段階での臨死体験の全体像を示すことができた。臨死体験の旅は，日常の外側の世界と日常世界を往還する，臨死体験の死と再生のイニシエーションの様相を呈している。

臨死体験後に価値観や感覚に大きな変化をきたした場合，日常生活で困難を抱える場合があるが，それを徐々に日常生活の中で調整しつつ，日常の外側の世界で得たことを日常に還元していくことが見られる。現代においては，日常の外側に触れるヌミノーゼ[9]的な体験をした後，そうした体験を日常の中に一種の豊穣として持ち込む道筋が社会的な経路として失われている〔田口＆宮台2005〕。臨死体験は日常の外側の世界と日常世界の往還の調和的な道筋を示唆してくれるかもしれない。

---

[9] 宗教哲学者ルドルフ・オットーは『聖なるもの』の中で，人間が超越的で神聖なものに出会った時に，概念では言い表しにくい畏怖と魅力の両方を含んだ感覚が湧き起こるとし，そうした感覚をヌミノーゼと呼んだ。

本論文では，調査に基づいた日本人の臨死体験の事例とそこから構成される全体像を示すのみにとどまったが，今後事例を蓄積させることによって，欧米の臨死体験との比較なども視野に入れたい。

本文中にも触れたが日本人に特徴的な臨死体験の要素があることが，先行研究の事例と本論文の事例から推測される。また，インタビュー調査の中で，臨死体験者が自分自身の臨死体験に驚きをもって振り返りつつ，他方ではそういう体験はあり得ることとして受け止めている場合が多いことに気づいた。しかし，たとえば欧米のキリスト教徒の臨死体験者はその宗教観に基づけば臨死体験をあり得る体験とは考えない。このように背景にある死生観や宗教観の違いによって，臨死体験後の人生観や価値観の変化の様相や度合いなどが日本人の臨死体験者と欧米の体験者とでは異なるという感触を持っている。日本人の臨死体験についてさらに事例を積み重ね，臨死体験の中に現れる内容の特性や臨死体験後の変化の特徴などについて，比較を視野に入れながら検討していくことで明らかになることは多い。

臨死体験研究は多くの分野にまたがる学際的研究として展開してきた。今後どのように共通了解を形成しながら研究を行っていくかについても，考えていく必要があるであろう。

【謝　辞】

臨死体験の調査では，お忙しい中，インタビューに応じていただいた方々，臨死体験をした方を親切に紹介くださった方々，双方に深く感謝申し上げます。

また，修士論文をご指導いただいた蛭川立先生をはじめとする諸先生方に厚く御礼申し上げます。

【引用文献】

- アトウォーター，フィリス　1997 『光の彼方へ』（角川春樹訳）（日本語訳初版1995年）ハルキ文庫（原著1994年）
- オシス，カーリス&ハラルドソン，エルンドゥール　1991 『人は死ぬ時何を見るのか』（笠原敏雄訳）（訳本初版1979年）（原著初版1977年）
- オットー，ルドルフ　2010 『聖なるもの』（久松英二訳）岩波文庫（原著1936）
- 柿原有一　2006 「臨死体験における自己実現と意識状態—パラドックス肯定のために」『トランスパーソナル学研究』第８号　トランスパーソナル学会
- 柿原有一　2008 「臨死体験からの帰還—「パラドキシカルな統合」の完成—」『トランスパーソナル学研究』10号　トランスパーソナル学会
- 木下康人　2003 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂
- ギャラップ，ジョージ　1985 『死後の世界—私は霊界を生きてきた—』（丹波哲郎訳）三笠書房（原著1982年）
- Greyson, B. 2000 'Near-Death Experience' Candera, E. & Lynn, S. J. & Krippner, S. C. (Ed) "*Varieties of Anomalous Experience: Examining the Scientific Evidence*" Amer Psychological Assn
- グロッソ，マイクル　1991 「ユング，超心理学，臨死体験—トランスパーソナル・パラダイムに向けて」グレイソン，ブルース&フリン，チャールズ・P 共編 『臨死体験—死と生の境界で人はなにを見るのか—』（笠原敏雄監訳）春秋社（原著1984年）
- 西條剛央　2007 『ライブ講義　質的研究とは何か』新曜社

- サザーランド，シェリー　1999 『光の中に再び生まれて—臨死体験に学ぶ人生の意味—』（片桐すみ子・他訳）人文書院（原著1992年）
- セイボム，マイクル・B　2005 『「あの世」からの帰還—臨死体験の医学的研究—』（笠原敏雄訳）（日本語訳初版　1986年）日本教文社（原著1982年）
- 田口ランディ＆宮台真司　2005 「〈世界〉を経由して〈社会〉に戻る」田口ランディ編『生きる意味を教えてください—命をめぐる対話』バジリコ株式会社
- 立花隆　2000a 『臨死体験（上）』文春文庫（文藝春秋）（初版1994年）
- 立花隆　2000b 『臨死体験（下）』文春文庫（文藝春秋）（初版1994年）
- 谷泰　1985 「旅の意義」『平凡社大百科事典』第９巻　平凡社
- ノイエス，ラッセル　1991 「人間の死体験——臨死体験から何を学ぶか」グレイソン，ブルース＆フリン，チャールズ・P 共編 『臨死体験—死と生の境界で人はなにを見るのか—』（笠原敏雄監訳）春秋社（原著1984年）
- ハリス，バーバラ＆バスコム，ライオネル　1993 『バーバラ・ハリスの「臨死体験」』（立花隆訳）講談社（原著1990年）
- プラトン「国家」 田中美知太郎編　1967 『世界の名著７　プラトンⅡ』（田中美知太郎・他訳）中央公論社
- ファン・ヘネップ，アルノルド　1995 『通過儀礼』（綾部恒雄，綾部裕子訳）弘文堂（原著1909）
- ベッカー，カール　1992 『死の体験——臨死現象の探求』法蔵館
- 松谷みよ子　2003 『現代民話考〔5〕 死の知らせ・あの世へ行った話』ちくま文庫（筑摩書房）（初版1996年）
- 宮田登　2006 『宮田登　日本を語る　7—霊魂と旅のフォークロア』吉川弘文館
- ムーディ，レイモンド・A　1989a 『かいまみた死後の世界』（中山善之訳）評論社（初版1977年）（原著1975年）
- ムーディ，レイモンド・A　1989b 『続　かいまみた死後の世界』（駒谷昭子訳）評論社（原著1977年）
- 山村尚子　1998 「臨死体験—終末医療における意義の検討—」『日本老年医学会雑誌』35巻２号
- リング，ケネス　1981 『いまわのきわに見る死の世界』（中村定訳）講談社（原著1980年）
- Ring, K. 1984 "*Heading Toward Omega —In Saerch of the Near-Death Experience—*" New York; William Morrow and Company, Inc.
- リング，ケネス　1997 『オメガ・プロジェクト—UFO 遭遇と臨死体験の心理学—』（片山陽子訳）春秋社（原著1992年）